OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大壺石濱純太郎先生・人と生涯 ： 特に大阪人として
Author(s)	村田, 忠兵衛
Citation	懐徳. 1972, 42, p. 5-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90496
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大壺石濱純太郎先生・人と生涯

——特に大阪人として——

村田忠兵衛

はじめに

昨夏七月はじめの頃、懐徳堂堂友會員の一人として、岡山地方の文化史跡見學一泊旅行に參加し、その歸路のバスの中で、會長の木村先生から、石濱先生のことについて、何か書いてはどうかというお話が出た。私に果してその資格があるのかどうかは疑問であるが、ただ石濱先生には永い間いろいろと學問上の御教訓を頂いた因緣がある。それも學校とか教室に於てではなく、懐徳堂内で常次例會を開いていた靜安學社のメンバーに加えて頂き、その席上で學社の諸先生の研究報告を、數年間、拜聽した因緣と、今一つは、石濱先生のお宅に再三再四御伺いして、二階の御書齋で時間を忘れて、多方面に渉る御高話を拜聽し、その上、貴重な御藏書を隨分多く拜借した因緣がある。私が最初に學問上の發表をさせて頂いたのも、靜安學社に於てであり、從って、會場は豐後町の懐徳堂であった。後年私が懐徳堂堂友會の一員に加えて頂いたことも、やはり一つの因緣であろう。又木村先生の前述の御下命も、やはり一連一環の因緣であろう。

但し私の如き不肖の門下生に「何か」を書かれることは、地下の石濱先生としては、さぞかし御迷惑であろう。因縁といっても、私にとっては勝縁であるが、石濱先生にとっては、或いは悪縁であったかもしれない。不文にして先生の學德を瀆すなからんことを、切念せざるをえない次第である。

昭和四十三年早春、永眠

石濱先生の生涯を知るには「石濱先生古稀記念東洋學論叢」（昭33、11刊、1958）の巻頭に掲げられた「年譜略」が最も信頼すべき資料である。又、その次に掲げられた「著作目錄」は、以って先生の學問上の業績の全貌を窺うに足るものである。この古稀祝賀出版は、文字通り先生に捧げられた不朽の壽像たるの價値を有するものである。

ただ、この年譜と目錄は、昭和三十三年から、先生の永眠された昭和四十三年二月十一日に至る約十年間のその後の部分について追補を要することはいうまでもない。この追補については、及ばずながら、後日を期して「簡潔なもの」を、心掛けたいが、ここではとりあえず、先生が四十三年早春の二月十一日、大阪府立住吉病院で、藥石効なく永眠せられ、御身柄は即日、大阪市住吉區墨江中一丁目四十五番地の御自宅に移されて發喪され、二夜の御通夜を經て、十三日同じく御自宅で葬儀を營まれ、會葬者一千に餘る盛儀であった。先生の法名は、清瀧院大壺純雅居士。享年七十九才、遺骨は石濱家御墓所（大阪市北區東寺町十二番地寶珠院内）に納められたことを記載して置きたい。

さて、石濱先生の生涯は、大阪に始まり大阪に終った大阪人としての生涯であった。

東大を卒業されるまで

明治二十一年八月二十七日、大阪市北區堂島中二丁目百六十八番屋敷が誕生の時處であるが、父君豐藏氏は當時二十八歳、母堂二十二歳先生は長男であった。三才年上の姉君は、のちに藤澤黃坡先生の室となられた方である。石濱

家は、先生の誕生された明治二十一年の十一月に東區高麗橋一丁目に移られ、さらに二十三年東區淡路町二丁目に移られ、先生はこの淡路町時代に幼少年期の大半を送られた。俗にいう船場のボンボンのお一人であったわけだが、同じく淡路町にあった汎愛尋常小學校を經、東區第一高等小學校三年から、府立市岡中學校が創設されるやその第一回入學生となったのが明治三十四年四月、十四歳の時であった。この市岡中學生時代に先生の同期生の中で小出楢重、田宮猛雄、信時潔など後年名を成した友人が出來た。

先生がその生涯の大半を送られた住吉區の御自宅も、市岡中學卒業の前年、三十八年、卽ち先生十八才のときに、父君が別宅として構えられたもので、當時の町名は「千躰町十五番地」であった。

さて、先生が東京帝國大學の入試に合格し文科大學支那文學科に在學されたのは、明治四十一年二十一歳の時であり、翌四十二年三月父君の桑梓の地に易簀さるるに遭って、家督を相續、同時に家業の丸石製藥合名會社の社員となる。四十四年七月、東大を卒業。卒業論文は全篇漢文で書かれ題名は「歐陽脩研究」であった。

卒論について

先生のこの卒論が立派な出來榮えであったことは、この成績なら、大學に殘しては……という議が、當時の文科大學の教授陣の中から生じ、もし本人が殘るというなら、銀時計組に入れてもよいというところまで來て、御本人卽ち石濱先生に、打診が行われたという。一方先生は家督相續人として、又丸石製藥の代表社員として、歸阪せねばならぬ立場にあった上に、いわゆる官學の牙城、東大の雰圍氣を必ずしも好んでもおられなかった。加うるに、銀時計と引換えに、大學に殘れとは學問の第一義から考えて甚だ筋が通らぬ、もし卒論が、銀時計に値いするなら、默って無條件で呉れればよいではないか、とばかり、その打診を一蹴されたらしい。これは先生の身邊に近い方から承った一つのエピソードであるが、事の性質上、實證的な資料があるわけではないし、その卒論の原文は、東大文學部の書庫

に納められたまゝ、或いは大震災で燒失したかどうか一見の便を得難い今日、「出來榮え」についても、想像の域を出ないのはやむをえない。

序でに今一歩、想像の域を擴大して考えると、歐陽脩は、有名な宋代の、碩學鴻儒。その一代の著述は「文忠公全集一百五十三卷付錄五卷」に殘され、これを通覽するだけでも絕倫の努力を要するが、果して若き日の石濱先生は、歐陽脩のどの點に興味を寄せられたのであろうか、恐らく後年の石濱先生の學風から考えて、古文復興に拂った彼の努力と成果、に興味をもたれたのではなかろうか。卽ち「毛詩本義」十六卷によって、毛傳鄭箋の必ずしも信じ難きを論じ、「易童子問」三卷に於て、繫辭、文言等を以って、孔子の作にあらざるを論證した歐陽脩の、漢唐以來の經說を打破した新風、その氣骨に魅力を感じられたのではなかろうか、と、想像する。

尙、先生の後年の學域は、考證學に端を發し、言語學、史學、の兩面から、支那はもとより、西域、印度の古代學全般に發展して行ったは、その間、先生が漢文漢學の本領を、決して放棄されなかったことに、我々は注目しなければならない、換言すれば、先生の學殖の豐かさ、その學域の廣さに眩惑されて、漢學が先生の本領であったことを見失ってはならないと思う。

幸福な家庭生活へ

明治四十四年七月に卒業された先生は二十四歲、その年の十二月に大阪第四師團所屬の歩兵第八聯隊に一年志願兵として入隊。除隊されたのは大正元年十一月であった。「入營中、僕は一度も上官から毆られなかったよ」と後年になって笑っておられたが、軍隊で一度も毆られなかったというのは、餘程要領がよろしかったか、或いは先生の天賦のユーモラスな性質の結果であったのであろう。除隊當時は歩兵伍長であった。

年譜によると、「四十五年六月一日、東京市牛込區、大城戸宗重の三女恭子（十七歲）を娶る」とあるが、入營中

に、擧式されたのであろうか。

先生の御夫婦仲の圓滿なことは、若輩であった往年の私の眼にも、推察に難くなかった。恭子夫人の亡くなられたのは昭和廿九年十月十七日、享年五十七歳であられたから、約四十年の好配と申すべく、先生は當時六十七歳であられたが、自來十二年近き晩年の御家庭には、何物にも代え難き大きな空虚が生じた。先生の圓滿なる風格、春風駘蕩たる溫容も、その溫床は圓滿な御家庭であり、就中、恭子夫人の內助の功の大きかったことを忘れてはなるまい。お二人の間には、五男四女を儲けられたが、次女直子さんは大正七年に、長女璋子さんは昭和三年に亡くなられた。

先生の好學の精神は、生來のものであったが、父君の影響も與って大きかった。その上、令姉が大阪の漢學者として有名な藤澤黃坡先生に嫁せられた關係もあって、先生は、學問は學問でも、家業の製藥には餘り關係のない漢學の方面に、生涯の進路を求められた。先生が成人された明治中期から末期の大阪、特にその中心地の船場あたりには、江戶時代以來の漢學の傳統がまだ濃く殘っていて、學問といえば修身齊家の實學、忠孝を二大眼目とする人倫五常を敎える漢學が、今日にくらべて遙かに重んぜられていた。そうした當時の環境の影響も又、見落してはなるまい。

さて、先生は前述の多幸にして圓滿なる家庭生活の中でも、又家業の丸石製藥を相續せられた後でも、依然として好學の精神を堅持された。

關西の學者文人との交遊

その好學の精神が、さらにすぐれた學者文人との接觸、交遊により磨き上げられたのが、大正の中期である。

年譜によれば「大正四年（二十八歳）この年、西村天囚氏の誘により大阪の文會「景社」に入り、長尾雨山、籾山衣洲、武內義雄らの諸氏と相知る」とあり、翌大正五年になると

「七月十六日、宇治花屋敷において、京都の文會、麗澤社と景社との第一回連合會あり、内藤湖南（虎次郎）、狩野君山（直喜）、青木正兒、岡崎文夫、神田喜一郎、小島祐馬、富岡謙藏、佐賀東周、那波利貞、福井貞一、藤林廣超、本田成之らの諸氏と初めて會う」とあり、大正十年には「この頃、石田幹之助氏と相知る」とある。

翌大正十一年に、大阪外國語學校が創設されるや、蒙古語部の選科委託生として同校に入學。偶々、國語學科の教師として同校に赴任した龜田次郎氏とも相識の仲になり、この石田、龜田兩氏とは終生、親交をつづけられた。それにしても、大阪外語に先生が入學されたのは、三十五歳の時で、二十歳前後の青年に伍して、勉强された先生を想うと、その好學の精神の純粹さに、感銘せざるを得ない。一年落第して下級生と机を並べることすら、恥辱とする人が多い中に、十五歳の年少者と机を並べるのみか、時にはデパートの食堂まで、肩を並べて付き合ってしるこをたべたというから、先生の些事に拘泥しない天成陽氣な風格が、改めて偲ばれるのである。しかし大阪外國語學校は、先生にとってさらに二人の重要な人物を親友として結ぶ媒介役を勤めた。

その一人は、羽田享、他の一人はニコライ・ネフスキー。羽田先生は東洋史擔當の講師を兼擔して外語へ來られ、ネフスキー先生はロシア語の教師として、シベリア經由、赴任して來られた。東洋史研究に於ける蒙古語の重要性は冗言を要しないが、先生はさらに進んで、ネフスキー先生と相識るに及んで、ロシア語の修得にも一段と努力され、さらに世界の學界に於て當時未踏破の領域であった西夏語西夏文字の研究に、ネフスキーとともに本格的な歩武を進められるに至った。

先生の西夏語研究は、のち民國二十一年（昭和七年）北京の國立圖書館から

「西夏文八千頌般若合璧考釋」

「西夏語譯　大藏經考」

と題し、ネフスキー氏との共著として公刊された。後者は周一良譯となっている。（著作目錄に依る）

尙、先生が開拓された西夏語研究は、先生晩年の門下から同じく大阪出身で大阪外大を經て京大言語學科を卒業され、現に京大文學部言語學科教授西田龍雄博士が立派に繼承され大成され、その成果に對して先年日本學士院恩賜賞が授與されたことは、地下の先生に於かれてもさぞかし御滿足であろうと思う。

後半生への轉機

先生の七十九歳の生涯を、前半と後半に兩分することが許されるならば、前半の終期、卽ち三十七歳から三十八歳にかけて、外遊されたのは、前半期の最後の仕上げともみられる。卽ち大正十三年三月大阪外國語學校の第二年を修了されるや、卒業を待たず、退學され、同年七月、京大の內藤湖南教授に隨伴し、教授の令息內藤乾吉氏とともに東洋語書籍調査のため神戸から渡歐された。パリを經てロンドンに約一ヶ月滯在、主として大英博物館所藏の敦煌遺書の調査に從事され、次でドイツ、オーストリア、スイスに遊び、ウィーンでは上原專祿氏の案內をうけたとある。

再びパリに戻り、約二ヶ月滯在中、國民圖書館及びペリオ氏宅に於て、敦煌遺書の調査を續行。東大在學當時からの友人エリセーフ博士（のちハーバード大學教授）、松本信廣氏の協力を得られた。歸途、ロシア、アメリカ旅行を企畫されたが、ロシアは革命後日なお淺く、アメリカは排日法案通過の直後という情勢であったためか、この企圖は實現せず、僅かにイタリア旅行を經て、再びマルセーユから乘船、翌十四年二月歸國された。

大阪で生涯を送った先生が、大阪を離れた期間の主なものは、この八ヶ月のヨーロッパ旅行と東大在學中ぐらいなもので、まさに特筆に値する。

さて、既に述べた如く、このヨーロッパ旅行を一轉機として、先生の後半生が開始される。卽ち修學と研究に費された前半生がここを轉機に教授と公表、後進の教導と、研究成果の陸續たる公表、という開花時代を迎えるのである。但し先生の場合、學問によって世俗的な榮位を望むといった心構えはみられず、むしろ教師たるよりは一學究たる

ことを、終生心掛けていられたように思う。私が先生から頂戴した唯一の墨跡には、「只啓風氣不爲師」とあるが、先生の精神は、終生この一句で一貫していたと思う。

靜安學社

先生の後半生は、多幸圓滿な御家庭の繼續という意味では、あえて區別する必要もないが、學會を組織し、又、有緣の大學から委囑されて講壇に立たれるといった面で、前半生には見られぬ積極的活動を展開しておられる。就中、先生が努力されたのは、學會組織により、前述の「たゞ風氣を啓く」ことで、大阪の町人學問の傳統を、新時代に適應した形で復興したいというのが先生の念慮であった。次にはそうした學會の席上、口頭で發表された研究内容とか又は別途に、有緣の雜誌等に、執筆公表された所謂「文筆活動」がある。

學會の面では、先生は、昭和二年九月（四十歳）「靜安學社」を組織された。發起人は、先生と高橋盛孝氏前記のニコライ、ネフスキー氏の外、淺井惠倫、笹谷良造の諸氏であった。先生は推されて幹事となり、十一年六月まで、事實上の主宰者として獻身的に活動された。學社の名稱「靜安」は、先生の畏敬しておられた王國維の字、「靜安」を冠したもので、先生の王國維に對する傾倒は、その志操、人品は勿論だが、やはりその學風を重んぜられたからであろう。王國維（一八七七―一九二七）は周知の如く清末以來、中國の産んだ偉大な學者である。若くして我國にも遊學したが後、宣統四年、清朝亡び、中華民國となるや、羅振玉と相携えて我國に亡命、京都東山に隱棲、この約四年間の亡命生活中に、その學殖は更に豐富となり、學風亦一轉機を畫したといわれる。民國十六年（昭和二年）六月二日、北京西南郊の昆明湖に投身自殺した。再興の見込のない清朝の末路に、身を以って殉じたという。靜安學社が、同じ年の初秋に發會したのも、石濱先生等が、この志操人格、學術孰れの點に於ても一世に卓越した大學者の悲劇的な死に對し、哀惜敬慕の情禁じ難きものがあったためであろうし、さらにその學風を、京攝の地、否、我が大阪に移

殖、發展せしめようという念慮に出たものであろう。考證學、就中、敦煌學の面で、王國維と先生との結び付きは、淺からぬものがあった。

私が、靜安學社の一員に加えられたのは、昭和十二年前後かと記憶するが、勿論、石濱先生の御勸奬に依るところであり、眞の學問とはどういうものかを、この學社の研究活動を通じて啓發して頂いた學恩は、今尙忘じ難きものがある。尙、戰後、山口益博士、長尾雅人博士、稻葉正龍博士らとともに日本西藏學會を創立され初代會長として盡力された功績も忘れ難い。

執筆と講義

先生の初期の著述として、まとまったものは、大正十二年に印行された「富永謙齋先生小傳」と、同十四年の「敦煌石室の遺書」で、前者はのち昭和十五年、創元社から名著「富永仲基」と集大成され、後者は、十八年四月同じく創元社から單行本として刊行された「東洋學の話」の劈頭に若干の修補を經て、再刊された。孰れも先生の學風、乃至學問の特色を遺憾なく示したものであるが、しかし學者としての先生の最も學術的な研究業績は、やはり、昭和十八年七月に全國書房から刊行された「支那學論攷」一卷であろう。

さらにその前年の十七年七月に同じ書房から出た「浪華儒林傳」を加えて、單行本として公刊されたこの四卷が、比較的世上に流布しているが、先生の學問を示す代表的な著書とみてよい。

しかし、その執れの場合も、いわゆる「書きおろし」は、せいぜい序跋ぐらいなもので、內容の大半は、種々の機會に、種々の刊行物の中で發表されたものである。比較的長文のものが少く、要点だけを簡潔に書く先生の執筆態度が窺われる。但し、講演を再錄したものは、先生獨得ともいうべきソフトタッチの話術で、內容のむづかしさにも拘らず、話術の巧妙さによって、聽衆を最後まで惹きつける魅力があった。「東洋學の話」一卷が、先生の話術の妙趣

をよく示している。

先生の學術の本格的な紹介は、畑ちがいの私の任でないが、先生御自身常に「大著に名著なし」といっておられたし、長々しい論文を見て「誰でも知っていることを、何もわざ〳〵こんなにダラ〳〵と書かんでもよいのになあ」と、呟いておられたのを、今更の如く想起する。又「つまらんことを、持って廻って、うまく書き上げたもんだねえ、たしかに彼は文才はあるね」といった辛辣な批評を下されているのを、承ったこともあった。

いわゆる「大家」連中の「胡麻かし」「いゝ加減」に對しては、先生の批判は、きびしかった。その半面先生は、御自分の業績に就ては、極めて謙抑な態度で、いささかも誇示される風はみられなかった。先生の著書の「序」「跋」をみれば、先生がこの謙抑な態度を、一貫して堅持されていたことが窺われると思う。

學校關係

先先が教鞭をとられた學校の所在地は、大阪と京都が主で、其他は天理大學（奈良縣）ぐらいなものだが、年代順にみると、大正十四年四月關西大學專門部講師を囑託されたのが最初であろう。終戰後、先生が關西大學教授となられ、文學部に大學院を設置し、又、關大から、前記「支那學論攷」を主たる研究業績として文學博士の學位を授與されたのであるから、先生としては關大との關係は有終の美を濟したわけだが、先生はもともと責任の重い教授のポストを敬遠しておられた。比較的拘束のない非常勤講師のポストが、むしろ先生の好みであった。要するに學問そのものを講授しておれば、それでよく、煩はしい學校管理とか學園經營、乃至教育行政といった面は、本來の學問の第一義に立てば、極めて煩雜にして面倒な岐路だから、先生は、當然、これを好まれなかったのであろう。

關大との關係は、もともと先生の義兄に當る藤澤黃坡先生が、關大教授であり、又、靜安學社同人の高橋盛孝、笹谷良造氏らが關大教授だった關係にもよるのであろう。泊園書院の藏書が、先生の斡旋により關大の架藏に移ったの

も、これは大阪文化に由緒の深い泊園書院にとって有終の美とも稱すべき一つの轉結であった。

先生が出講された學校を、年代順にみると、

昭和三年一月　大阪高等學校漢文科講師
同　年五月　京都龍谷大學史學科講師
四年四月　關西大學文學部講師
八年九月　關西大學第一豫科講師
九年四月　關西大學法文學部講師
十年五月　龍谷大學史學科東洋史學科主任
十二年四月　京都帝國大學文學部講師

（終戰後）

二十一年五月　大阪外事專門學校講師
二十二年五月　鳳高等學園講師
二十四年三月　大阪外國語大學講師
同　年四月　關西大學文學部教授
同　年五月　天理大學講師
二十五年四月　帝塚山學院短大講師
同　年六月　關西大學文學部大學院教授

昭和二十五年といえば、先生は既に六十三歳であった、先生は生來、健康に惠まれておられたから、壯年期に於て、陸續と研究成果を公表される傍ら、以上にみる如く多方面の學校に出講され、學生の指導は勿論、教師連中の啓發指

導にも大いに努められたのであるが、大體この六十三歳を迎えられた頃から、活動分野を徐々に整理縮少して行かれたようであった。殊に廿九年十月、恭子夫人の長逝は、先生にとって何ものにも代えがたき寂寥であり、自來、四女の郁子さんが先生の御身邊のお世話に獻身されたとはいえ、恭子夫人亡きあとの晩年の先生には、一抹の陰影、避くべくもなかったのである。

同じ年の文化の日に、大阪府知事は永年に渉って鄉土の先覺を顯彰し、大阪の教育を振興した先生の功績に對し、「なにわ賞」を贈った。生涯を大阪人として學界に、教育界に貢獻された先生の晩年を飾るにふさわしき贈り物であったし、先生もさぞかし本懐とされたに相違ない。

先生の大阪史觀

ここで、公刊された著書の中から、先生の大阪文化への史觀といったものを、若干、引用することを許して頂きたい。（浪花儒林傳より）

先生は既に述べた通り、漢學を御自分の本領とされた關係もあるが、同時に上古から德川時代に至る學問そのものが漢學を主流とするものであったのであるから、次の如き記述となるわけである。

「大阪と漢學との關係は隨分古くて、殆ど我國の漢學史の最初からと云ってもよい。我國へ漢學の傳はったのは……中略……先づこの王仁を以って我國漢學史の初めとして差支はない。王仁は大和朝廷に來朝したので、大阪との直接關係は明記せられたものは無いが、何しろ後の河內文首の始祖ではあり、又難波津に咲くや此花冬籠り云々の歌を作ってゐると傳へられてゐるのだから、……乃ち大阪と漢學とは因緣深いものがあるのである。

應神天皇の時に正式に漢學が輸入せられて我國の政治や文化に貢獻し初めたが、次の時代の、仁德天皇の御時には都を大阪に遷されてゐる。文化の中心が大阪へ移ったのである。新興學術たる漢學も大阪で榮えたので、かの御聖世

を飾った事は勿論であろう。」

徳川時代の漢學に於ける三傾向

先生の史觀は大和朝廷を經て、南北朝、室町時代と、かなり飛ぶが、私はさらにそれも飛ばして、徳川時代へ、先生もこの時代に力點を置いていられる。

「徳川時代の漢學の大勢を按ずるに三つの傾向が見られる様である。一つには支那より日本へ、漢學は支那から輸入した學問であるから、支那中心の研究であるのは當り前である。古注にしろ、新注にしろ、朱子學にしろ、陽明學にしろ、皆支那の學問である。然し之を我國の學者が研究するに於ては、研究して得た一理の當然は我國の當然でなければならない。漢學の研究進歩は支那中心から日本中心へ移って行った。だから日本が中朝であり中國であり、聖人湯武の放伐は非であり、孔孟攻め來らば之を捕殺するのみとなったのである。徳川の諸儒、說は反し派は異にするも概ね支那中心を離れ日本中心に移る傾向を持ってゐる。文字の末に拘泥せず意志の本を大觀せば皆然り。

二には西より東へ。思想運動は西卽ち上方地方から江戸へ派及する傾向があると云ふのである。蓋し江戸は新地なんだから文化運動は却って西に起って東に向ふのである。幕府が東に設けられるに當って……西の漢學が東へ及んだのである。陽明學が中江藤樹により、復古學が伊藤仁齋により、朱子學復興が大阪の混沌社中により、皆新運動をして東國に大影響を與へたのである。西より東へは大勢であった。

三には上より下へ。漢學は君子の學である。上行するのは當然であったが、肯えて仕進の途に就かざる京儒、諸侯を睥睨して道を講ずるの東儒、町儒者として立つものが多くなると、上行の學も漸く下行の學に移り行き、商賈庶民之を修むるものが多くなった。三都の如き大市のみでなく、地方でも下行するに至った。大阪の漢學は此等の人が多い。」

この三傾向の中に立って商地としての大阪は中々異色があった。

大阪學問の異色

「江戸は官學所在地であり、集まる他の諸儒も多いが、何分にも政治中心地であるから、自由なる獨創には不便である。京は文化の土地であり、公卿諸士の儒學が存して奔放なる卓見には不利である。此點になると大阪は商賈の大都會として風氣は文化に遜するとは云ひ難いが、富力の積む所禮儀文雅を慕ふに至り、學を爲すに俗に殉ふの譏はあっても思想の壓迫は少いから、往々にして先聖の徒を出だし得る。豐潤なる文會を以って名有った混沌社の連中から寛政異學の禁の運動が起るに徴しても之を知るに足らう。商都であるから自由を喜ぶが、空理空論の無益を厭うて實踐的なるを尊ぶ。從って經義を說くも經濟を必ず顧みる。然し地氣の致すところは京に近く、豐臣氏の餘澤は德川氏に好意を寄せないから、尊王の大義は忘れない。尊王の大義と自由研究と經濟財力とから茲に特異の漢學を醸成したのであった。

大阪の儒學者は町儒者が本體であって、江戸の官學者藩學者と異っているのは土地柄である。然し官儒藩儒の來って門戸を開いたものも多いが、町人から儒者になったものも少くない。後には懷德堂が出來て學問所となって準官學となったが、それも半官立の待遇を受けた丈なので、內容は町人式であった。準官立の懷德堂は國定の朱子學を標榜してゐたが、實はもっと廣汎なものであった。大阪へは諸方の學問が這入り込んだので、朱子派ばかりでない。朱子派以外に堀河派陽明派山崎派徂徠派等種々あるが、根が商都の事とて實學を重んじ理論爭ひに墮せない。今大阪學者數人を例に擧げて大略を述べよう。」

以下、石濱先生の記述は、五井持軒から三宅石菴に及び、懷德堂の朱子學が當初から偏固なものでなかったこと、石菴の弟子に中井甃庵があり、五井蘭洲と仲が良かったことなどから、いよいよ懷德堂創立の經緯に入って行くので

あるが、周知の事柄も多く、先生も又、懐徳堂に關しては西村碩園博士の考に詳細を悉しているからと、多くは述べられず、ただ懐徳堂ゆかりの碩學鴻儒として、富永仲基、山片蟠桃を、甃庵の二子竹山履軒とならべて稱揚しておられる。次で先生の筆は、懐徳堂の經義と並んで當時の大阪を我國に重からしめた片山北海の混沌社に觸れ、北海を盟主として集った篠崎三島、賴春水、細谷斗南、木村兼葭堂、河野恕齋、田中鳴門、葛子琴、小山伯鳳など儒醫商各種の名士が、この詩文の會で單に置酒高會、文藝を玩んだのではなく、後年の寛政朱子學復興の素因が、この詩會に周旋した諸君に起ったこと復興時の昌平校博士は皆この間から出たことを指摘して、大阪の天下の學術に關係あるや、かくの如しと結んでおられる。

さらに、簡單に篠崎氏の梅花社、大鹽中齋の洗心洞と陽明學に觸れ、幕末の藤澤東畡から、南岳、黄鵠、黄坡と相嗣いで、石濱先生に至った泊園書院に及んでおられるが、最も傾聽すべきは、先生の結語の一節ではなかろうかと、思う。卽ち、先生が、この稿を起されたのは昭和十三年、時恰も日支事變から大東亞戰爭、さらに太平洋戰爭へと戰火を擴大せんとする前夜であった。

儒者の經濟說に注意せよ

「商都として立つ大阪が意外にも古へから、又廣く深く、漢學文化と緣が深かった事が分る。今抗然世界を睥睨せんとする大阪の力も、先輩が吸收した漢學精神に其幾分、否昔は學問が漢學であったのだから或はその大部分を歸せなければならぬかと思われる。然るに今の大阪に於ては其精神力の修養機關は如何だ。物質文化の研究機關は喧しく論ぜられるが、精神文化の研究を云爲するものは罕である。物質文化を盛んにするに就ては、精神文化を伴はさねばならぬ適證を眼前に見てゐるのではないか。政治家官公吏は日々の事務以外には出でないものである。市民自身が御國將來の爲めに精神文化の作興に心掛ねばならない。大阪先覺の遺した事蹟に鑑みて自身の力で奉公の誠を致すべき

だ。――中略。

尙ほ大阪漢學者の經濟說に注意したい。彼等は常に當時の商賈富豪諸侯のよき顧問であった。實際に家產の整理に與って良好の成績を擧げたものである。彼等の經濟說には治國平天下の財政學もあるが、修身齊家の經濟說が多い。單なる說でない實効ある策があった。今流行する西洋式經濟學は理からの經濟學だが、彼等は事からの經濟策だ。大阪は今でもこの事からの經濟談が必要である。彼等の講說こそは直接に物質文化と精神文化を結び付けるものと云ってよい。我等はこの修身齊家の市民の經濟學も省みるべきである。」

先生は、やはり商都大阪に生れ、生涯をこの商都の中に送られた方であるとこの所說に觸れて私は思う。

後記

先生の著述を通じての學問論には故意に立入らず、ただ手許の僅かな資料から先生の生涯を簡敍すべく心掛けたつもりであるが、その成否は自信をもてない。尙、最後の引用文は努めて先生の用字用語を尊重したつもりだが、不徹底の點は讀者の寬恕を乞うほかない。

最後に、先生の御藏書「石濱文庫」は先生の逝去後、御遺族、特に令嗣石濱恒夫氏の御芳志により、大阪外國語大學圖書館の架藏に移され、既に目錄も概略完成したが、公表までには尙若干の校正、檢討を要する。漢籍四五〇六部一九三二八冊、和書四五四七部、六三七一冊、洋書一九七七部、二二九四冊、合計一一〇三〇部、二七九九三冊となっているが、なお、遺漏の点も少なからず例へば雜誌類は部冊數には含まず、手記稿本寫眞類も含まれていない。これらは今後、分類整理の工作に入る。

孰れ、石濱文庫に就ては、學內學外の關係者の了解を經て、委細、報告する機會もあろうかと思うので、茲では省略に從う。

（昭、47・8・15稿）